

日本の本当の姿 世界に発信 最高賞該当なし

今日の日本が直面している憲法、安全保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が、外国人による優れた日本研究を顕彰、奨励する第6回「国基研 日本研究賞」の受賞者3氏を選出した。

最高賞の「日本研究賞」に該当作品がなく、「奨励賞」に米国出身の神戸大学大学院法学研究科教授、箕原俊洋氏（47）と、チベットの出身の拓殖大学国際日本文化研究所教授、ペマ・ギャルポ氏（65）が選出され、「特別賞」は特別で歴史家の秦郁彦氏（86）が選ばれた。「日本研究賞」は広い国際的視野

に立つて日本の在り方を再考する国基研の活動に共鳴する寺田真理氏からの寄付を元に平成26年に創設された。対象となるのは日本に帰化した1世を含む外国人研究者で、政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で日本に対する理解を増進する研究に対し、近年に刊行、発表された日本語が英語による作品から選出されている。国基研の櫻井理事長は特別賞を受賞した秦氏について「慰安婦について実に深く研究しており、日

韓両国が正しく歴史を理解し、日本の本当の姿を国際社会に発信する一助になると考え、特別で日本人に授与した」と話した。

また、田久保忠衛副理事長は奨励賞の箕原氏について「日米関係の長い歴史の中で、人種問題がいかに理性でコントロールされてきたかが描かれており、これまでの歴史認識への新たな視点を立派に説明している」と評価。ペマ氏については「若くして祖国を奪われ日本に移った経験があるからこそ気づけた、日本の国民性への指摘を与えてくれる大変有意義な作品」とたたえた。

■選考委員
櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長（委員長）
田久保忠衛・国基研副理事長、杏林大学名誉教授（副委員長）
伊藤隆・東京大学名誉教授
平川祐弘・東京大学名誉教授
渡辺利夫・拓殖大学学事顧問
高池勝彦・国基研副理事長、弁護士

来月10日 記念講演会
日時 2019年7月10日（水）午後3～5時（開場2時）
場所 イノホール（東京都千代田区内幸町2の1の1 飯野ビル4階）
会費 3000円（一般）、1000円（国基研会員）
※当日会場でのお申込みはできません。
申し込み方法 【記念講演会参加希望】と明記の上、氏名（国基研会員は会員番号も記入）、郵便番号、住所、電話番号を記載し、はがきもしくはFAXでお申し込みください。参加券を発送いたします。6月28日必着。定員（400人）に達し次第、締め切ります。
〒102-0093 東京都千代田区平河町2の6の1 平河町ビル5階
公益財団法人 国家基本問題研究所 S係
FAX 03・3222・7821
URL https://jin.jp

移民問題の根底を鋭く考察

箕原俊洋氏は日米関係を主とする国際政治学を専門とする傍ら、移民に関する著書も多い。そこにはアメリカの日系四世であるという背景があり、ルーツをなす日本人移民の歴史をひもとくことは「自然な成り行きかもしれない」と語る。

受賞対象となった『アメリカの排日運動と日米関係―「排日移民法」はなぜ成立したか―』（朝日新聞出版、2016年）では、日本人移民の歴史を単純にたどるのではなく、日米両国の関係を「パワー」「国益」という国際政治の基本的な範疇にとらわれず、移民問題の根底にある「人種の誇り」という感情的側面を交えて考察し、両国の政治家、日本人移民の思惑や苦悩葛藤を感じ取れる。

神戸大学大学院法学研究科教授

奨励賞 箕原俊洋氏

の市政における勢力関係などの事情と交わりながら、「日米開戦論」がささやかれるほどの外交問題になっていく。

第一次世界大戦を経て米国での対日感情はさらに悪化。日本政府が移民問題解決に向け外交努力を重ねる一方、米国では排日機運が政治利用され、日本人移民の排斥とは無関係な政治的情勢が「排日移民法」の成立を後押しする。

に宛てた書簡の一句が対米恫喝だと解釈され、それが成立を促したとの見方が強いが、本書ではそれまでの日米関係や国内外の動向から、異なる視点で検証することの必要性を感じさせている。

「ありのまま」知って
《受賞の言葉》自分の研究を評価していただき、こんなにうれしいことはありません。日本における日米関係の理解は一元的であり、それゆえ誤った理解をされていることもあると感じています。この本が、正しい、ありのままの日米関係史を知るきっかけになればと思います。

《講評》高池勝彦・国基研副理事長
本書は、アメリカの排日運動と日米関係について、膨大な資料を基に詳細に論じたものである。従来いくつかあった日本人移民の歴史ではなく、また、個々の日系人に焦点を当てた歴史書でもなく、あくまでも排日問題がどのように日米関係

ペマ・ギャルポ氏は、中国軍の侵略を受ける祖国チベットからインドに亡命し、1965年、12歳のときに留学生として日本に移住した。日本で、チベットの文化、歴史やアジア地域問題などの研究を続け、2005年に帰化。現在は、日本とアジア諸国の関係に着目した研究も多く、受賞対象の『犠牲者120万人 祖国を中国に奪われたチベット人が語る 侵略に気づいていない日本人』（ハート出版、2018年）において、日本が国際社会において直面している危機に警鐘を鳴らす。



拓殖大学国際日本文化研究所教授

日本が直面する危機に警鐘

いく役割を持つ存在であると位置づける。

来日してから約半世紀間で、国際化や経済発展の名のもとに日本は大きく変化してきたが、その変化こそが日本に危機をもたらしたと指摘する。北朝鮮の脅威や領土問題など「外的」問題だけでなく、社会が変化する中で公共精神や共同体意識を失ってしまったことによる国民の結束のなさ、一國平和主義ともとれる国際感覚の欠如という「内的」問題も日本の解体をもたらさしうる脅威だということに気づかされる。それは、侵略された時のチベットに酷似しているという。

拓殖大学国際日本文化研究所教授

奨励賞 ペマ・ギャルポ氏

ペマ氏は「日本人には同じ悲劇を繰り返してほしくない」と願い、チベットへの関心を誘うとともに、日本で生活する中で得た出会いと経験、気づきから、日本をより良くするための提言を寄せている。

《受賞の言葉》光栄な賞をいただき、私の著作が多くの人に読まれ、社会に影響を与えられたらと願います。無限の可能性をもつ日本人が、世界で何が起きているかを知り、自国を見つめ直すことで「意識改革」ができれば、世界により貢献できる国になれると信じています。

《講評》田久保忠衛・国基研副理事長
祖国の悲痛な運命をよく知るチベットの少年が日本で中学、高校、大学を終え、日本人として暮らしている。来日53年。日本が中国にどのように対応すべきかの課題にページ数を割き、同時に日本人が認識しなければならない戦後の日本

の在り方に触れる。先の大東亜戦争に関しては、日本を悪者にする中国とは正反対の見方をとり、日本のアイデンティティーなどは見当たらない憲法を「平和憲法」などとありがたがっている日本人に、切歯扼腕（せつしやくわん）する。日本の蒙を知りつくしているようだ。

慰安婦問題の教科書、海外にも

受賞対象となった『慰安婦と戦場の性』（新潮社）は、慰安婦や詐話師といわれる吉田清治氏への聞き取り調査、慰安婦問題の発火から後手に回る日本政府の対応、募集方法や歴史まで多岐にわたる「慰安婦百科全書」となっており、それを英語で出版した事が評価された。

第1章では、当時の宮沢首相訪韓5日前に掲載された意図的な朝日新聞のキャンペーン記事に対し、自らの裏付け取材もなく追隨するマスコミ各社と後手に回る政府対応が問題を大きくさせたことがわかる。

吉田清治氏への聞き取り調査では、実証主義者らしく、済州島の「慰安婦狩り」などのあやふやな証言を他の証言や資料で覆し、最後は「小説だった」という声明を出したかどうかと、追いつめていくさまはノンフィクション小説のように読み応えがある。済州島地元記者の「何が目的でこんな作り話を書くのでしょうか」の言葉が印象的だ。

はた・いくひこ 1932年山口県生まれ。現代史家（日本近現代史・軍史）。56年東京大学法学部卒業。大蔵省入省後、ハーバード大学、コロンビア大学留学。大蔵省財政史室長、拓殖大学教授、日本大学教授などを歴任。93年度の菊池寛賞を受賞。2014年『明と暗のノモンハン戦史』（PHP研究所）で毎日出版文化賞を受賞。第30回正論大賞を受賞。

《受賞の言葉》慰安婦問題は所詮、歴史の裏街道に潜む物語だ。私も似た感慨を共有してきたが、図らずもわが最終作は白昼の陽光にさらされてしまった。日本政府は「韓国を『あやしみてくれ』』という米国の要請もあり、甘やかしてきたがもはや限界で、反撃に転じる時代に来ている。

反撃に転じる時代
筆者はあとがきで情緒論や政策論を排し、どんな解釈や結論を引き出すかは読者の自由に委ねたいとしている。膨大な生の証言と1次資料を積み重ねられた本書こそ、日本人が慰安婦問題を語るべきの根拠となる教科書である。



《講評》平川祐弘・国基研理事
『慰安婦と戦場の性』（新潮社）は、この問題に関するもっとも信用が高い研究である。その英訳本は2018年に出版された。その英訳は虚言症の吉田清治氏の詐話や、その話を流し続けた『朝日新聞』、それに乗じた韓国や北米キャンパス・レフトの反日プロパガンダに対抗する学術上の発信としても有効である。「自国にネガティブであることが良心的日本人の証しである」といわんばかりの風潮の中で、グローバル社会で物言う日本の対外発信として例外的で貴重であると考えられる。

特別賞 歴史家 秦郁彦氏



1953年6月チベット生まれ。65年親元を離れ、来日。76年亜細亜大学法学部卒業。91年日本作家クラブ（現日本文芸家クラブ）初の外国人会員となる。2005年日本に帰化し、現在、拓殖大学・国際協力学研究所教授、チベット文化研究所名誉所長、アジア自由民主連帯協議会会長のほかモンゴル国大統領顧問、ブータン王国首相特別顧問などを務めている。

《講評》田久保忠衛・国基研副理事長
祖国の悲痛な運命をよく知るチベットの少年が日本で中学、高校、大学を終え、日本人として暮らしている。来日53年。日本が中国にどのように対応すべきかの課題にページ数を割き、同時に日本人が認識しなければならない戦後の日本

《講評》平川祐弘・国基研理事
『慰安婦と戦場の性』（新潮社）は、この問題に関するもっとも信用が高い研究である。その英訳本は2018年に出版された。その英訳は虚言症の吉田清治氏の詐話や、その話を流し続けた『朝日新聞』、それに乗じた韓国や北米キャンパス・レフトの反日プロパガンダに対抗する学術上の発信としても有効である。「自国にネガティブであることが良心的日本人の証しである」といわんばかりの風潮の中で、グローバル社会で物言う日本の対外発信として例外的で貴重であると考えられる。